さらいいヨシュトの洗っさ芋や山盤りいなっている。顔 を上げると、カレアがカップを禁し出していた。中にお透 明な水依人でアパる。二人却交互コはッて多回し、報考す 一が膨しよう

を黙引で述むのお心地負い。 巨ジェアお思みず、蹴笑ん笑。 **きれなら水、土、 引砂の一部多小さな代でス球ご料知をあ**。 買れないヨシュアに指導しつつの作業であったためだろう。 **ホンプの家の問囲お、映と遠いなっていす。 映の猫の間** ヨシュアとカンでお、井戸から扱んさ水を思い撒いた。 それざせ締えるのに太陽な空の中天へ具ろうとしていた。

「お昼は、豆と芋を煮ようかな? 採ったばかりだから、

「……なんでもいいよ。お腹が空いて死にそうだから」 ヨシュアの言葉にカレブは吹き出している。その顔をヨ

るだけにする。安心して」 「ごめん。初日から大変だったよね。午後は、村を案内す 芋の入ったたらいを二人で運ぶ。濡れた芋は皮がところ

席 どころ剥げ、中の身が白く光っていた。 ・ 芋の入ったたらいを二ノて美さ ・ キャ

6 掛巾 いる。

24

で託り

村の周囲を包んでいる森は、昼でも薄暗い。

たけど、もう少し乾燥させたほうがいいと思うから。今晩、 「余分のネギを粉にかえてもらったんだ。芋も納めたかっ ヨシュアはカレブの抱えている袋を指さした。

いる。みな白い体毛に覆われ、幼い子供の姿をしていた。 村には、カレブとヨシュアを含めて十二人の『人間』が 頭の中にだけある情報というものは心許ない。しかし、

サインされていた。虫冑い直接、柴料を帰り込んが味青汁。

るおで並んでいる。ひとの幼大き〉、きで引む徐小ち〉で

草をヨシェての前へ立われ。そこひお、数字の『8』が

「きで三年と二七月、経ってる。ここ
3来てんら。 3はんら、

。 やいとはいい 「」、「ら」、「ら」 とはされている。 まるれていい まい

仕込んでおいて明日、パンを焼こう」 「さっきの何?」

天多計ちしている。

| | | | | | |

鳴を上げた。

ころめんは。急ぎ見いなさやって。ぼうは、もで相間依な 「おおんあるんだね」 「止めて、止めて」

「お願いだから。ちゃんとする。気持ち良くするから」 咀嚼するような音とすすり泣きが辺りを圧していた。 懇願するが、殴打は止む気配がない

てすべてが静寂に包まれた。 怒鳴り声と何かが折れる音、不規則な呼吸が続く。やが

·····・許して。……お願い」

は皿おこでき。 水酥や火のことお映力事な鷄はでアゆら鮨

次ウと古脚を開き、脚を計ちす。

しなるも即

「玉伝ら時、昼、麹のは茶汁も。ここさもが砂糖で先で1み

**たしてお言聴を聞く。 壺と缶らて瀬、金属の缶は並んす** ||解腎しては休ないと知ら休いならなこて よら大変 げきの 「ヨシュア、ヨシュア!

音が頭の奥で軋んでいる。 を起こし、額を押さえた。金属をこすり合わせるような高 薄く開いた視界にカレブの姿が映る。ヨシュアは上半身

「うなされてたよ。大丈夫?」

合而でお、既手のない素熟きの茶碗な島辰を立てている。

その関面に砂糖をひとつ落とし、カレブはヨシュアに喫茶

「時お、知〉依新けさゃに式むど、は昼却きも依めにては。

置されている。

と椅子、ベッドの木枠や白と青の細かい格子柄の寝具が配 質素だが、清潔な部屋にヨシュアは目を向けた。棚、机

「うん。……たぶん」

ら渡された作業着に着替える。 ヨシュアに確信はなかったが、そう答えた。パジャマか

「そう、曳かった。様えないといけないことがよくちんあ

るから。までお、はきて・キッチンで持ってるは」

よしてお手を<br />
減りながら<br />
治国から<br />
出了行った。<br />
その<br />
掌い 

日シェアきたして い誘き、森のひんやりする 土を踏みし

小麦饼の袋を蹲りしまり、森の中へ入っている。 い出そうとしても像のとントは合わなかった。 「丸く数を式から姓えてはくは」 「おかいついま

13

留 **心なうとき、 知人 引動を る 尺 見 多 替 C 人間 お、 す 五 し ア い Eシェてお**、自代の 島が 帰脚 ちは アいる と 懇 切る

八部 1 中多文 4 逃り 窓 こ 2 いる。 末 3 中 多 と り 5 け 、 患

姿である。 Eシェてお、 国大な筒を亜然と郷めるおんりぎ。 黒いき並である助お、エリやカレでとも行動はおい生き 「きみお黒いんさね。こんなの内めて見た。素強さなあ!」 このよい言いられず、「裕」の表面に誰を試みする。 筍に 十六帝の娥字徐容依む。即盟宗了』ろ文字依け式水式。 高の表面お鏡となり、<br />
ヨシェアの姿を刺し出す。 みきこの筒を抜けてきさんだ」

屠所の羊 出せない。

\* き却むアいる。 激弾の舌 佐斉皆の口参加いぶ。 解し 徐顯氏よな。 神粉の沖こが置。 巻』 沈よ。 巨ジュア、 き

小ちな泣愚な囲むもではして三角屋財の家々と既な恵 を脅化した。 芸書お思らず、目を背わる。 強らした来以光 なっている。その多ろい響着と森の木が依戴り、苔香の心 知くたちの材がよ。これからは、きんの材できあるは」

**よしてと呼ばれた主き婦なエリの機へ立が、周囲を示し** 

足首から先だけは体毛がなく、滑らかな肌が露わになって いる手足は柔らかそうな白い毛で覆われている。顔と手首 「ぼくの名前はエリ」 「……ぼくは?」 名前の意味は理解していたが、若者は自分の氏名を思い 「カナンへようこそ! 心配しないで。ぼくたち仲間だよ」 彼らは、みな揃いの作業着を着ていた。衣服から伸びて 目を覚ました若者をたくさんの生き物が覗き込んでいる。

「大丈夫だよ。神様の本できみの名前を決めるから」 座り込んでいる若者を助け起こし、エリは鞄から本を取

石柱の影を追う。目盛りを読んで数字を答えた。 「今日は良いお天気だから正確にやろう。カレブ、頼むよ」 エリと同じ生き物らしい一人が、草の上に屹立している

「うん、だって。……自分の名前を思い出せない」 頁をめくっていたエリが若者に尋ねる。

かまわないかな?」 「……ヨシュア。きみの名前はヨシュアにしようと思う。